

書 評

アンドレ・ヴォシェ監修
『フランスとイタリアの隠修士 (11—15 世紀)』
(エコール・フランセーズ・ド・
ローム集成, 第 313 番)
dir., André VAUCHEZ, *Ermites de France
et d'Italie (XIe-XVe siècle)*

小 野 賢 一

この書物は 2000 年 5 月 5 日から 7 日にかけてイタリアのシエナ大学の協力を得て、エコール・フランセーズ・ド・ロームが主催したシンポジウムの記録をヨーロッパ中世教会史家アンドレ・ヴォシェの監修で個別論文の形式に統一し、一冊の書物にまとめたものである。この書物とその元になるシンポジウムはエコール・フランセーズ・ド・ロームが推進する一連の研究プロジェクトの一環である。まず、1996 年に『地中海世界の人間・空間・神聖』と題された研究プロジェクトが立ち上げられ、続いて 2000 年には本書と同じ「エコール・フランセーズ・ド・ローム集成」の第 273 番として『神聖な場・信仰の場・聖墓所』が刊行された。本書は先行する 2 つの研究プロジェクトの延長線上に同じ問題意識をもって編纂された。一連の研究プロジェクトの共通テーマの「神聖な場」に隠修士研究の側面からアプローチしたのが、本書である。

本題に入る前に、西欧中世の隠修士とはどのような存在であったのかを簡単に述べたい。隠修士というのは、修道士よりもさらに厳しい禁欲生活を行い、断食やメディテーションに励む人たちをいう。隠修士は好んで人々にとって近寄りがたい辺境の地を棲家にした。隠修士の好む辺境の地は、史料の中で「荒野」*eremus* という言葉で表現される。古代東方に生きた聖アントニウスにとっての「荒野」は砂漠であった。西欧中

世の隠修士にとってのそれは、野獣やならず者が行き交う鬱蒼たる森である。隠修士にとって森に引き籠もるという行為は、世俗の法や規範を逃れ、アジールに入るという神秘的かつ象徴的な意味を持っていた。引き籠もると同時に隠修士は彼らの高いモラルから生ずる霊的な威光と説教で西欧キリスト教世界全体の変革を試みるという現実的かつ積極的な志もあわせ持っていた。隠修士にとって、内向的態度で引き籠りを志向しつつ、外向的態度で社会変革をめざすという相反する理念をいかにして接合するかが問題になる。西欧中世の文書の中で、前者の理念は「キリストの貧者」(パウペレス・クリスティ *pauperes Christi*)、後者の理念は「使徒的生活」(ウィタ・アポストリカ *vita apostolica*) という言葉で表現されている。「キリストの貧者」の理念に「使徒的生活」の理念を接ぎ木する過程で重要になるのが、「共住生活」(ウィタ・コムニス *vita communis*) という第三のキーワードである。初期の隠修士の多くは「孤住生活」を好んだが、社会にほとんど影響を与えないまま歴史の闇に消えていった。本書では、「キリストの貧者」の理念に「使徒的生活」の理念を接ぎ木すべく、「共住生活」を積極的に導入した時期の隠修士、即ち社会変革に乗り出し始めた隠修士が、調査の対象にされているといえよう。

さて本題に戻りたい。隠修士を扱った本書では、先行する2つの研究プロジェクトと比べて特有の難しさがつきまとう。そもそも隠修士は教会制度上マージナルな存在であり、史料の中に十分な痕跡を残さなかった。それゆえ教会制度史の研究で利用される教皇文書、司教文書、国王文書、各種の教会文書集成などの証書史料群はあまり役に立たず、書き手の党派性、偏見、思い込みなどによって幾分バイアスのかかった聖者伝史料などのナラティブな史料を積極的に活用せざるを得ないという事情がある。まずは史料論にはじまり、次に、いかにして史料論を超克し、最終的に隠修士の実像に肉薄できるかが問われる。本書の序説で監修者のヴォシェもマージナルな存在の隠修士を扱った本書の論者たちは、特に史料の問題に力点を置いて論じざるを得ないと述べている。

アンヌ・マリー・エルベティウス「隠修士と修道士 ― 5世紀―10世紀の孤住と共住(主にガリア北部) ―」は、10世紀以前の隠修制は11世紀以降とは異なり、そもそも聖俗を分けることが困難であり、さまざま

な意図で作成された隠修制に関する史料は、権力、権威、所領といった権力編成の諸問題と密接にかかわり合うと主張する。隠修制の研究については霊性史の領域で目覚ましい成果が提出されている。その反面、制度や権力編成の問題はマージナルで反権力的な隠修制と親和性が低いとみなされる傾向があった。この論考の問題意識は画期的であり、本書の巻頭論文にふさわしい内容である。本論考の問題提起を継承し、グレゴリウス改革期の隠修制の権力編成を解明することは、私たち教会史研究者に残された課題であろう。

ジャン・マリー・サンステール「10世紀後半から11世紀に修道制の刷新に直面するイタリアのベネディクト修道制とフランス所在のイタリア系ベネディクト会士」は、戒律、聖者伝、書簡などの様々な種類の史料を駆使して隠修制の修道制に与えた影響を考察し、ベネディクト派修道院にも隠修制の影響が一定程度及んでいることを明らかにした。シトー会修道院出現以前のベネディクト派修道院と隠修制の影響関係を探る視点は新鮮である。

セシル・カビー「Finis eremitarum? — 中世の隠修制の律修形態と共住形態 —」は、隠修士の生活の制度化(共住形態の導入)、律修化(律修形態の導入)、教会当局の許認可によって制度上の妥協が実現し、隠修制の理念と現実の矛盾が覆い隠されると主張する。この矛盾は隠修制研究の主要テーマだが、なぜ矛盾が覆い隠されるのかが十分に論証されていない。隠修制の制度化・律修化は決して稀な現象ではない。隠修制がいかにして規範化(normalisation)し、西欧中世キリスト教社会のスタンダードになったのかを問うべきであろう。隠修制の矛盾の解明には社会経済史や制度史(権力編成)などからのアプローチが不可欠であるように思われる。シトー会修道士ペレグランの著書『フォンテーヌの共住制』から、Finis eremitarumという言葉を用いて論述を開始したのに、十分に敷衍する前に、シトー会、アウグスチヌス会、カルトジア会などに議論を拡散させているために叙述が平板な印象を与える。

ジャン・エルヴェ・フロン「フランス西部の隠修士 — 史料、総括、展望 —」は、史料の豊富なフランス西部に空間を限定し、聖者伝、過去帳、公文書、文学、歴史編纂などの多様な類型の史料を有効に活用する前提となる予備的作業として、それぞれの史料を整理する。論者は叙述

史料を公文書史料によって補正することの重要性や多様な種類の史料を併用することの利点を強調する。フランス西部はアジールとなる森が多いこともあって、各地から多数の隠修士を引き寄せた。隠修士の活動領域として、一括して把握可能なフランス西部という空間の設定は、研究史を踏まえたものであるだけに納得できる。本論考は何かを積極的に論じるものではないが、優れた研究の手引きであり、本書所収の論考の中で最も実用的価値がある。

マチュー・アルノ「ノルマンディー地方の隠修士と庵（11－13世紀）」は、禁欲的な霊性の魅力ゆえに隠修制がノルマン教会で発展したという説を避け、むしろノルマン教会が辺境の未発達地域であったので辺境を好む隠修制が発展したと主張する。当該地方の隠修制の在俗と律修の曖昧さが指摘されている点が興味深い。律修化されていない俗人隠修制を今後研究していく上で当該地方の隠修制の研究がきわめて重要であることを本論考は教えてくれる。

エルヴェ・オダル「ドルのボドリの語りの中の師アルブリッセルのロベール ― ロエのノートルダム修道院の創建期の会士たちの霊性と法的状況 ―」は、ドル司教ボドリが編んだアルブリッセルのロベールの『第一伝記』と証書を利用し、隠修士集団が教会ヒエラルキーに取り込まれ、制度化された後もロベールに対する尊敬はいささかも衰えることがなかったことを明らかにする。

ポレット・レルミト・ルクレルク「中世フランスの都市、環境、隠遁」は、第二千年期の都市の発展にともなう隠修制の変化を論じる。本書の監修者の趣旨に従い、a. 宗教史料（聖者伝、過去帳、戒律、書簡）b. 社会経済史料、私的権利史料（公証人の記録、カルチュレール）、公的権利史料（国王の証書、議決記録、都市の財産記録）c. 文学史料（例話、年代記）d. 考古学史料、を利用することの重要性を指摘するが、恣意的な史料種類の分類と厳密さを欠く史料操作に疑問が残る。第二千年期という焦点のぼやけた年代設定で18世紀までを考察の対象としているため、論述が粗い。ピエール・ブルデューの理論的影響下にあることを論者は隠さない。社会学者が好む宗教の世俗化論の堅牢な枠組みと史料による実証の兼ね合いが問題となろう。社会学に無知な評者には、本論考では、史料が二次的な役割しか果たしていないように思えてしまう。

ジャン・マリー・マルタン「ギリシャ正教，ラテン教会，イタリア南部の隠修制（10－13世紀）」は，南イタリアに多く存在していたラテン教会式隠修制は，ビザンティン修道制の影響の下で発展したギリシャ正教式隠修制の影響をほとんど受けていないと主張する。ラテン教会史家とギリシャ正教史家はしばしば信条に基づいて棲み分けを行っており，客観的な比較研究そのものが少ない。その点で貴重な研究といえる。

オルドリック・ルドン「マルムの隠者聖ギョームの調査」は，ギュイオム会の創始者たる聖ギョームの『第一伝記』を史料として利用し，この短い文書が後の時代にどのように加筆修正され変化してゆくかを克明に示す。アキテーヌ侯ギョームとの同一視，16世紀の治癒者への変貌など『第一伝記』には存在しない内容である。ギュイオム会が創建時よりアウグスチヌス会であったとする説も誤りであることを明らかにする。論者は叙述史料のみ利用しているが，執筆年代の異なる諸版の異同を分析することによって歴史を多面的にとらえ，叙述史料につきまとうバイアスを除去している。

アンドレ・ヴォシェ「中世の聖者伝の隠修制（フランス，イタリア）」は，聖者伝文学の中の隠修制の理念と現実の溝を埋めるためには，列聖，列福の手続き文書，修道会慣習律，ミニアチュール，図像などの種類の異なるさまざまな史料の併用が必要と主張する。この論考は，中ほどに配置されているが，本書とその元になるシンポジウム全体を貫く問題意識と方法論を明らかにしており，それゆえ本書全体の総括といってよい。

カトリーヌ・サンシ「東スイスの隠修士の史料」は，隠修士の活動について豊富な史料を残すサン・ガル（ザンクト・ガレン）修道院の古文書を利用して，スイス東部の隠修士とベギン会修道院の実態を解明する。叙述史料を主に利用しているが，叙述史料のバイアスを可能な限り除去しつつ，宗教改革期の混乱状態にある隠修制の実態を克明に描き出す。

シルヴィー・アルマンド「フランチェスコ会の戒律遵守と隠修士によって創建された施設——ブルゴーニュ地方の事例——」は，隠修制の影響を受けた15世紀の4つのフランチェスコ会の施設を分析し，都市でクーヴァンとして発展してゆくグループとフランチェスコ会の特徴をより強く保持するグループに分かれてゆくことを明らかにする。アッシジのフランチェスコの手を離れた後のこの会派の変容に関する実証研究はまだ

まだ少ない。フランチェスコ会の全体像をアッシジのフランチェスコから演繹するのではなく、逆に実証的な研究の積み上げによって全体像を構築することが求められている。本論考は実証的な地域研究の良いモデルといえる。

以上の如く、史料類型の選別と史料操作の工夫が本書所収の個別論文の随所に看取される。しかしながら、監修者のヴォシェが提唱するような考古学史料、図像史料などの利用は、考古学者、美術史研究者によって排他的に達成されているにすぎない。本書には、考古学者、美術史研究者の論考も収録されているが、文献史学とは方法論上の著しい相違があり、批評できなかった。文字史料を利用する論者たちも、それ以外の史料に関心を示さず、隠修士研究の史料の希少性を考古学史料、図像史料などの相互利用によって補完しあうには至っていないのが残念である。文字史料の利用に関しては、叙述史料のバイアスを除去する史料操作、様々な史料類型の併用による実態の把握などの研究方法の発展にはめざましいものがある。史料論にはじまり、それを超克し、隠修士の実像に肉薄するという本書の課題は文字史料に関しては概ね達成されているとあってよい。本書の刊行によって隠修士研究は新たな飛躍の段階を迎えたといえるだろう。浅学な評者には浩瀚な本書所収のすべての論考を評することができず、22本の論考のうち12本に絞って評したことをお許しいただきたい。